卒業論文
学校教育における「化粧」の変遷
――「たしなみ」から排除へ――

2009 年度入学

九州大学　文学部　人文学科　人間科学コース

社会学・地域福祉社会学専門分野

2014 年 1 月提出

要約

本論文は、化粧をめぐる社会の規範意識と、女性にとっての化粧がどのような役割を果たしているかを見出すことを目的としている。現代日本社会における女性の化粧は、マナー、たしなみ、そして楽しみとして、一種の文化を形成している。女性たちは化粧を肯定的な自己表現の手段・技法として用い、周囲との関係性をとりもつために用いていると言われる。しかし化粧はかつて、男女を問わず行われてきた文化的行為であった。

ではなぜ現代日本では、一般に女性だけが化粧をし、男性は化粧をしないのだろうか。そして日本社会において、どのような規範意識で化粧行為がなされているのか。女性が日々化粧をしている理由やしていない理由、その歴史的背景に関しては、化粧品会社や諸学者の調査によって時代ごとに明らかにされてきたが、その根幹に存在する規範意識についてはこれまであまり注目されてこなかったように思う。

また、明治時代から昭和時代中期にかけて、学校教育において化粧が「礼」「たしなみ」とされ、家庭・学校ともに女学生に積極的に化粧をさせていたという史実がある。しかし、現代の学校教育ではそれとうってかわって、化粧は学校教育（主に中学校・高校）において一種の悪徳とされ、規制・排除されている場合が多い。その価値観の変化を疑問視する声はあるものの、その要因や背景について具体的に調査・分析を行った研究はない。

そこで本稿では現代の女子高生の化粧に関して、初婚年齢の変化や女性の進学率上昇、ジェンダー史、そして予め実施した高校生に対するプレインタビューなどを考察した上で、以下４つの仮説を立てた。１）女子校では共学校よりも化粧に対する規制が厳格である、２）高校生の化粧第一義は「自分を魅力的に見せるため」または「欠点を克服するため」である、３）「高校生らしさ」という社会規範が化粧行為の選択に影響を与えている、４）教師と生徒の間には権力関係が存在し、教師にとって化粧の規制は、生徒の「支配」に寄与している、の４点である。調査対象は高校生と高校教師とし、学校と社会との比較や学生・教師たちの化粧に関する規範意識の相違などをさぐった。そして、女性たちの化粧行為の有無や程度がその女性が生きる社会の反映である考えることで、化粧が担う社会的役割を探った。

共学校に通う男女計 12 名と女子校に通う女子生徒 2 名、そして共学校の男性教員 1 名にインタビューを行った結果、公立高校と私立高校、そして化粧をする生徒としない生徒との相違があきらかになり、女子高生の実態が見えてきた。まず私立高校における商業主義的な教育方針がある可能性が示唆され、その中で厳しく統制され、「広告塔」としての女

子高生像が浮かび上がった。また大人とも子どもとも言えない「高校」という学校教育において、「化粧」は微妙な立ち位置に置かれており、彼女たちは、学校外の社会や教師、そして友人たちの目から、「高校生である」という前提のもと晒されているし、自身が社会的に未成熟であることを自覚している。そういった環境下でかつての社会規範であった「女らしく」から離れ、「高校生らしく」という新たな社会規範の中に身を置きながらも「化粧」を選択したり、しなかったりする。明治時代の女学生と違う点があるとすれば、支配や期待に抗うも従うも、自ら選択しているという点である。自分がどう認識されているかを理解した上で、自己の価値観を「化粧」または「すっぴん顔」に反映させているのではないだろうか。彼女たちにとって化粧は、かつてのように単に「選ばれるため」のものではない。彼女たちそれぞれが、多様で複雑な期待をもって化粧をしている。それは例えば自分ではない何者かへの変身欲求を満たしてくれるものであったり、他者に紛れることで安心感を与えてくれるものであったりもする。

明治維新から約 150 年間、社会における女性の立場や生き方が大きく変化してきたが、それに伴って、化粧の意味も性質も変容しつつある。明治時代、「礼」や「身だしなみ」であった女学生の化粧から、現代の高校生の多様な化粧にいたるまでの変遷は、女性の生き方そのものの変化を象徴していると言っても過言ではない。

目次

はじめに 1
1　化粧文化の歴史と現状 1
1.1 化粧行為の定義 1
1.2 化粧の目的 2
1.3　現代の化粧習慣における「ねじれ」 2
1.3.1 化粧の好悪と化粧行為 2
1.3.2 化粧に対する規範意識と行動範囲 3
1.3.3 社会の規範意識への歩み寄り 4
1.4 化粧の歴史と規範形成 6
1.4.1. 化粧は「礼儀作法」であり「成人の証」 6
1.4.2 男女における化粧の分岐点 6
1.4.3 二重の権力関係 7
1.4.4 フェミニズムと化粧 8
2 先行研究の考察 8
2.1 生物学的観点における化粧 8
2.2 社会学的観点における化粧の役割 9
2.2.1 父権社会における後天的な性的役割分担 9
2.2.2 「玉の輿」と化粧 9
2.3　現在の化粧行動と個人差要因 10
2.4 現代日本社会におけるジェンダーの在り方 11
2.5 社会に晒された化粧行為者 12
2.5.1 企業戦略と「欠点の克服」化粧 12
2.5.2 社会モラルとしての化粧 13
2.5.3 現代の働く女性の美意識 13
2.6 男性主導経済の変化 15
3 学校教育における化粧行為 16
3.1 化粧する女学生・化粧する女子高生 16
3.2 子どもが化粧をする時代 17
3.3 明治時代の女学校における化粧 19

3.4 現代の学校教育における化粧 19
3.4.1 「高校生らしさ」という判断基準 19
3.4.2 通過儀礼的に逆転する規範意識 20
3.4.3 学生と有職者女性の化粧目的の違い 20
3.5 初婚年齢の上昇に伴う変化 22
3.6 教室内での序列と容姿 22
4 高等学校における質的調査 24
4.1 質的調査の概要 24
4.2 本稿インタビュー対象者のコード化 24
4.3 高校生へのプレインタビュー 25
4.3.1 プレインタビューにあたって 25
4.3.2 化粧好意度と化粧回避行動 25
4.4 高校生・教員へのインタビュー 26
4.4.1 本調査の概要 26
4.4.2 寛容な公立校と厳格な私立校 26
4.4.3 「紛れる」「目立つ」という目的意識 27
4.4.4 「女らしさ」から「高校生らしさ」へ 29
4.4.5 教師が見る「化粧」 30
4.5 高校生にとって「化粧」とは 30
おわりに 31
付録 1 プレインタビュー 35
1.1 C-A 高校の生徒へのインタビュー（いずれも化粧はしていない生徒） 35
1.2 C-B 高校の生徒へのインタビュー（いずれも化粧はしていない生徒） 36
付録 2 高校生へのインタビュー 37
2.1 FN-1（私立 F-A 女子高校 3 年） 38
2.2 CN-1（福岡県立 C-A 高校 3 年） 39
2.3 CN-2（福岡県立 C-A 高校 3 年） 40
2.4 CY-1（福岡県立 C-A 高校 3 年） 40
2.4 FY-1（私立 F-B 高校 3 年） 41
2.5 CM-1（福岡県立 C-A 高校 3 年） 42

2.5　CN-4（福岡県立 C-A 高校 2 年）..... 42
2.6　CY-1 （福岡県立 C-A 高校 3 年、2 回目）..... 43
付録 3 公立高校教員へのインタビュー..... 46
付録 4 文部科学省「生徒指導提要」第 7 章より一部抜粋..... 49